

牛群検定通信 No164

～ 栄養管理と観察方法 ～

酪農において儲けを考慮した飼料給与は、牛が必要としている栄養を過不足なく給与し、無駄をなくすことで達成されますが、過不足のない給与が行われているかどうかを判断する方法は確立しているとは言えません。

牛群検定の乳成分データを用い、飼料の過不足やバランスを測ることはできますが、これも月に一度のデータであり、リアルタイムのデータではないため月に何度も起こる分娩や事後の管理に直ぐに使えるデータとしては頻度が足りず、日々刻々変化している牛の状態に併せて給与量を変更させるには無理があります。そこで、日々変化している状況を把握するためのデータ化を行う必要性を痛感し、判断基準として栄養状態がリアルタイムで表現される牛体のボディコンディションを含む表情の変化で判断することを考案してみました。

この方法は熟練さえすれば、酪農現場でコストをかけずにチェックする方法として有効ですし、何より牛をよく観察することになりますので、病気や事故の予防や早期処置、更に発情の発見に大きく貢献する等、飼料給与以外でも経営改善に与える効果は非常に大きなものがあります。更に、牛群検定データを加味すれば一層正確に栄養状態の把握ができます。

確かに、酪農家は牛をよく見てはいますが、その状態が何故、或いはどのようにして引き起こされたかという理論の勉強をしっかりとしていないため、適切な対処ができず、観察ができていないのと同じこととなっています。一方、我々支援組織の人間は、理論やデータの見方は勉強しても、栄養状態を観察によって測定するという考え方をする人は今までいませんでしたし、また、観察を飼料給与に役立てるといような考え方もありませんでしたので、観察自体が不得意の場合が多くなっています。

最近では、牛の発するサインを見逃さず、飼養管理に役立てようとする考え方が酪農現場では徐々に普及してきていますが、栄養管理まで説明しているテキストは未だ見あたりません。

牛は喋ることはありませんが、その表情や表現から実に多くのことを我々に教えてくれます。元気が無く、体調が優れていないときは目に力が無く体全体の活力もありませんし、カルシウムが不足しているときには腰角が冷たくなりますし、肝臓の機能が低下したり、ケトーシスの場合は毛色が茶色くなってきます。逆に栄養が行き過ぎているようなときには、毛艶はピカピカとなり、採食はガツガツと勢いが良く、反芻も強くなりますし、それが長い間続くようであれば牛は徐々に太っていきます。また、栄養のバランスが崩れていると、フケが多くなったり、ルーメンアシドーシス気味の場合は、蹄の間がピンク色になったりします。

このように、注意深く観察を行えば、牛の体表面は牛の栄養に関して様々なことを我々に教えてくれ、しかもリアルタイムの情報として飼料給与に役立てることができるのです。

(渡邊)